

原著論文

モラエスと小説『孤愁 〈サウダーデ〉』

～新たなモラエス像の可能性～

宮 崎 隆 義

Moraes and the Novel *Koshu - Saudade* -
- A Possibility of New Aspect of Moraes -

MIYAZAKI Takayoshi

要 旨

ポルトガル人ヴェンセスラウ・デ・モラエス（1854-1929）は、徳島で16年間過ごして没した。徳島の土地と人々を慈愛に満ちた目で描いた『徳島の盆踊り』（1916）や『おヨネとコハル』（1923）は、100年前の徳島の姿を祖国ポルトガルに伝えている。そのモラエスについては、2012年に藤原正彦が父新田次郎の遺作を書き継いで小説『孤愁 〈サウダーデ〉』を完成した。モラエスを知るには格好の評伝小説であるが、モラエスの実像とその虚像との隔たりには留意しておかなくてはならない。だが、この小説によってモラエスの新たな側面が開ける可能性がある。本論では、親子2代、ふたりによって書かれた類まれな小説に見られる特徴と、その小説が開く新たな可能性を検証しておきたい。

キーワード：モラエス、実像と虚像、小説、小説の声、史実、父と子の関係

1. 小説『孤愁 〈サウダーデ〉』と小説の機能

新田次郎（1912-1980）は気象学者として気象庁に務め、大きな仕事としては富士山頂の気象レーダー建設に関わっていたことが知られるが、同時に健筆を発揮し、『強力伝』（1956年）により第34回直木賞を受賞し小説家としても活躍した人物である。新田次郎とモラエスとの出会いは、富士山頂の山小屋に、花野富蔵訳の『モラエス全集』が置かれていたことがきっかけであったとされる。モラエスに関心を抱き、モラエスゆかりの地を調査して長編小説『孤愁 〈サウダーデ〉』に取り組むも、病に倒れ未完となった。1912年に新田次郎の次男で数学者、エッセイストの藤原正彦（1943-）が、父新田次郎の未完の小説を書き継いで完成し、親子2代に渡り父と子ふたりで書かれた小説として話題となった。

新田次郎の息子にあたる藤原正彦が、父の未完の絶筆を書き継いで完成させたということ、親子2代、ふたりによって書かれた小説ということでは大変興味深い。文学の世界で、共作や合作というものが無いことはなく、例えばイギリスのチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812–1870）は推理小説作家のウィルキー・コリンズ（William Wilkie Collins, 1824–1889）と共作をしているが、共作であっても作品を読んでみればふたりの文章は全く違っている。言葉の使い方や息づかいが異なり、いわゆる文体が全く違っているのである。推理小説の世界では、エラリー・クイーン（Ellery Queen：Frederic Dannay, 1905–1982, Manfred Bennington Lee, 1905–1971）がよく知られているが、この場合には、ひとりがプロットを、もうひとりが文章を書いているので、ここで言う合作、共作とは少し違い、共同制作といってよいだろう。

親子で小説を完成させたということについては、その文章が、その文体がどう違っているか、そのあたりひじょうに興味深い。藤原正彦は『孤愁〈サウダーデ〉』の「あとがき」のところで、父新田次郎の文章をできるだけ尊重し言葉や表現を変えるのは最小限にしたということを書いているが、親子であるということで、やはりその文章はよく似ている。文章の息づかいというものが、やはり親子であるというふうに感じられる。親子であったがこそ、この小説が完成し得たといってもいいだろう。

モラエスは実在の人物であり、実在の人物を小説として描くということは極めて困難なことであろうと思われる。それに対して架空の人物を主人公とした小説は、書く人の想像力によって書くものであるから自由に描き出すことができる。前述のチャールズ・ディケンズという小説家は、『ピクウィック・ペーパーズ』（*The Pickwick Papers*, 1836–37）という弥次喜多道中記のような小説の中に、350 人もの人物を登場させてしかもその人物たちを描き分けていると言われている。シェイクスピア（William Shakespeare, 1564–1616）も、数多くの戯曲にあれだけの数の人物を描き分けているのであるが、このように人物を言葉で描き分けるということには相当の困難があり豊かな才能が必要ということがいえるだろう。

『モラエス案内（増補再版）』に収められている座談会の様子で、立花マルエは、叔母のおヨネとモラエスが知り合ったいきさつや、姉のコハルとの話など、マルエの記憶と、その後のモラエスの話や他の人による話のことも含めて、あまりに違うので不思議に思っていると述べている。

「モラエスの印象」立花マルエ談

或る人（花野富蔵氏）の話では、おヨネが滝の焼餅屋に奉公して居た時、偶々徳島に訪れたモラエスと焼餅屋であったなどと云はれていますが、叔母は焼餅屋に居た事実はなく、若い時から家の都合で大阪で芸妓に出て居たのです。

・・・・・・・・

叔母の死後暫くして、姉のコハルと結ばれたのでした、彼がオヨネの法要の際来徳し、その席でコハルに始めて会ったという説も事実ではありません。今まで新聞、ラジオ、或は書物等でモ

ラエスさんの事は度々伝えられていますが、私の記憶とは余りにも違うので私は不思議に思っている次第です。¹

このように、実在の人物をモデルにして書くということには取材の方法にもよるが、大変難しいところがあり、実像とはかなりかけ離れていくことはよくあるようである。どうしても語り手、書き手によって人物が違ってき、書き手の思いが文章に反映されてしまい、登場人物が書き手に重なってしまう傾向がある。

それゆえに現実の人物像と文章に描き出された人物とは大きな乖離が生じている。少し想像してみればわかるが、自分の目の前にいる人を言葉だけで説明することは大変難しいものである。写真やデッサンなどで見せれば大体わかることが、言葉だけで説明するということになる大変な困難が伴う。小説家は、言葉だけで、髪の毛の色、目の色、肌やしぐさ、性格、言葉遣い、服などを描き出し描き分けようとする。小説は言語芸術であるがゆえに、言葉だけですべてを表そうとするわけであり、作者は自分の想像力で言葉を紡ぎながら人物を描き出すのであるが、言葉で書き表された人物を、今度は読む人、つまり読者がひとりひとり自分の想像力で自分の頭の中に作り出す。そこが言語芸術の要であり、ひとりの作者、ひとりの小説家が想像力で作り出した人物を、今度はたくさんの読者がひとりひとり自分のものを勝手に頭の中に作り出しているわけなのである。それがおもしろいところなのであるが、そもそも言葉には、換喩性という機能がある。これは、冠といったら王様、イスといったら権力の象徴、帆といったら船、といったように、一部が全体を表すという機能で、言葉が持つたくさんの機能のうちのひとつであるが、その機能のはたらきにより、言葉や言葉が紡がれた文章によって、素晴らしい暗示の芸術、言語芸術というものが生まれているのである。その機能、そして、人間が持つ想像力という力によって、言葉の中に人物が生き、過去の人であっても、文章が存在する限り、その文章の中に息づいている、永遠に生きることになる。モラエスという人物も、おヨネやコハルも、文章がある限り文章の中に生きているのである。

谷崎潤一郎(1886-1965)に『春琴抄』(1933)という作品があるが、盲目の春琴の美しさは、盲目の世界、観念境、つまり想像力の世界に永遠に息づいている。熱湯で火傷を負った春琴の姿を見ないように、丁稚の佐助は両の目を縫い針で突いて自ら盲目になるが、そうすることによって、観念境、つまり想像力の世界に美しい春琴の姿を永遠にとどめることができるのである。その春琴を描いた「春琴抄」という、佐助が書いたと思われる冊子は言葉で書かれたものであり、その冊子がある限り、言葉がある限り、その言葉の世界に春琴はいつまでも永遠に美しい春琴として生き続けるのである。

2. 新田次郎の文章

モラエスという実在の人物を描いた小説『孤愁〈サウダーデ〉』は、前半部が新田次郎の文章であり、そこにはやはり新田次郎の「声」がする。小説における「声」(voice)は、語り手の「声」、登場

人物の「声」、作者の「声」というものがあり、小説の発展に従って複雑な「声」の組み合わせが工夫されることとなる。単純な説話の語り手から、物語の語り手はより複雑となり、小説の作り手は、作品によっては、作り手としての「声」を極力消そうとする努力をする。だが、実在の人物を描いた評伝的な小説に、作者の「声」が外枠の語り手として存在することはやむを得ないであろう。小説『孤愁』は、「美しい国」から「日露開戦」までが新田次郎の文章であり、そこにはやはり新田次郎の「声」がある。そしてその部分の全体的な印象としては、やはり自然描写が多い、気象関係の描写が多いということであろう。以下、少し引用が長くなるが、該当箇所を示しておく²。

引用1

「雨は三十分後には止むでしょう。そして間も無く晴れます」

モラエスはポルトガルの海軍少佐であり、マカオの港務局副司令官の地位にいた。(7)

引用2

「きっと晴れる。晴れねば詩にならない」

．．．．．

「あなたは軍人なのかそれとも、詩人なのか」

「その両方である。さらにつけ加えるとあなたと同じような商人でもある」(8)

引用3

モラエスは空を見上げた。完全に空は霽れ上がり、おそらく今宵は満天に星を戴く夜になるだろうと思った。(10)

引用4

彼はモラエスを誘ってデッキに出ると、前の島とその上空の雲を指して、「それぞれの島を飾って夏の雲」と抑揚をつけながらゆっくり口にした。そして、すぐ、

Above each islands, decoration of summer clouds

と訳し、その短詩に盛られた意味を説明したのはその後だった。

瀬戸内海の数多くの島は、それぞれ夏雲を頭上の空に戴いていた。モラエスはすぐそれが上昇気流による現象だと見て取ったが、その日本人が、島の上に雲が発生するという物理的現象を即興の俳句としてとらえたことにひどく感心した。

．．．．．

屋代島（周防大島）の上にかかっている夏雲はやがては雷雲にでも発達しそうに空に向かって威勢よく頭を持ち上げていた。(43-44)

引用5

香港を出た船は西に向かって走っていた。

大小の島が点在していた。船は島か岬かも分からぬような緑の島のすぐ近くを通ることがあった。

モラエスはデッキから海を眺めながら見馴れたこの景色と日本の瀬戸内海のそれとを比較していた。海の上の置物のようにやさしく、なだらかに描き出されている島々のたたずまいは全体的にはよく似ていたが、一つ一つの島の様相はどこかが違っていた。それは地質学的な相違によるものだろうか、雨量の相違によるものだろうか。小さな無人島が多かった。その近くを通るとき、島を形成している木々の間に隙間を見た。岩ばかりの島には、わずかながら草が生えていた。

瀬戸内海の島々との見掛けの違いは植生の相違から来るものであろうか。そしてすぐ彼は、そのあたりの海の色と瀬戸内海の海に比較して青さが薄いような気がした。その海の青さと対照的に島の緑の色は映しだされるのかも知れない。(95)

引用6

花の季節が過ぎて十月になると、雨量は急に少なくなり、十二月、一月、二月になると、乾燥した日が続く。そして、四、五月頃の濃い霧の中をモラエスはこの丘への石畳の道を登った。

モラエスはこの高等学校で商法史と経済を教えていた、カミーロ・ベサニヤ博士と親交を結ぶようになった。かねてから博士が中国通の詩人であることをモラエスは知っていたが、人間としてのカミーロ・ベサニヤを知ったのは、この学校へ来てからだだった。(118)

引用7

湖を右に山々を左に見ての行進はモラエスにとって文句なしの旅だった。まだ雪は見えなかったが肌寒い朝晩だった。リスボンに生まれ、成長してからは、モザンビークかマカオと暑いところで過ぎてきたモラエスには初めて体験する寒さだった。

(この乾いた空気と落葉の舞い舞う景色はすばらしい。これはポルトガルにはないものだ)

モラエスはそう考えながら、目を右側に転じて琵琶湖にやると、湖は季節風のために既に波立っていたが、全体的には静かな表情をしていた。

ポルトガルの冬は雨期に当り、落葉の林の中には蕭々と雨が降り続く。時には河川が氾濫することさえある。日本の雨量と比較すると半分以下であっても、雨期はもの淋しく、そのもの淋しさだけは同じだった。

空に目をやると、曇り出していた。野営予定地の雄琴川の河原まで来ると雨になった。(179)

引用8

モラエスは竹村のその言葉を自分の頭の中で、反芻した。南海の孤島の鳥島が爆発して、全島百二十五名の日本人が溶岩流に飲まれて全滅したのはつい一ヶ月前のできごとだった。地鳴り騒

ぎがあったのはつい三年前のことだった。日本という国はなんと天災の多い国であろう。日本人を見る場合、この天災の試練の中に生まれた国民であることを忘れてはならないと思った。(384)

人物描写ということになると、その言葉遣いなどによって人物のイメージができあがるが、それから考えると、モラエスは、若いということもあり、また海軍軍人ということもあって、上掲の最初の引用1や引用2でわかるように、多少不自然で堅苦しい感じがある。小説の主人公としては少し平板な感もあるが、それも新田次郎の意図でもあったろうかと思われる。

おヨネも、前半部では登場することが少ないこともあり、後半の藤原正彦の手掛けた部分に比べ、あまり生き生きとは感じられない。また、モラエスと語り合う他の友人たちも同様に平板で堅苦しい感じがある。

特に引用2に見られるように、小説の最初のあたりの会話などは、とても会話とは思えないくらいの堅苦しいやりとりとなっている。さらに、引用1からの続きとなるが、そこに天気のこと、気象関係の要素が絡めてあるのが興味深い。引用3から引用4に見られるように、風景描写とともに天気のことを書かれている。引用5にある香港あたりの場面についても、風景描写に加えて、雨量の違いや植生のちがいなど、気象学者である新田次郎のまなざしがうかがわれる。次の引用6にあるマカオのあたりでも、季節の話、雨量の話に気象学者新田次郎の目がモラエスという人物の背後に隠れているようである。モラエスも海軍軍人として、気象関係や地理関係、地質学関係の知識は十分に持っていたはずであるが、そのモラエスの背後にどうしても新田次郎の存在が感じられるのである。引用7は日本の琵琶湖あたりの風景描写であるが、乾いた空気という季節感、天気の様子なども気象学者新田次郎のまなざしである。次の引用8は、鳥島の火山噴火などの天災についての記述であるが、そのあたりはモラエスの書いた文章、例えば『日本精神』などの記述が下敷きにはなっていることがうかがえるが³、そこにもやはり新田次郎の目が重なっているのである。

引用9

「二、三年前までは人力車は鉄の車輪だったから、乗っている人も楽ではなかったが、このごろゴムのタイヤになってからずいぶん楽になりました」

途中、滝宮の茶店で休んでいるとき竹村が言った。

その人力車のゴムのタイヤを製造しているのがほとんど神戸の業者であることなど付け加えることを彼は忘れなかった。

そう言われてモラエスは人力車の車輪を見た。確かにゴムのタイヤが使われていた。竹村は楽になったと言ったがモラエスにはそうは思えなかった。麦畑の中を人力車はせつせと走り、車輪が窪みに入るたびに乗客をはげしく揺さぶった。そのたびに車夫は「ごめんなして」と乗客にあやまった。

菜の花はもう季節が過ぎていて見ることはできなかったが、黄色い花はよく垣根で見かけた。

ポルトガルに多いゲニスタ（genista）とよく似ていた。

モラエスはその花が気になってしょうがなかった。間近で見たかった。人力車が琴平町に入って、宿についたときも、それは庭に咲いていた。

「あの花の名は」

モラエスは旅館の廊下を歩きながらおよねに訊いた。

「あれ、エニシダですわ」

ごくありふれた春から初夏にかけての花であると、およねは説明した。エニシダ、エニシダとモラエスはそれを繰り返していたが、それだけでは満足できないのか下駄を履いて庭におりるとその花に顔を近づけて確かめた。

「間違いなくゲニスタです。ポルトガルの南部からスペインにかけてはイニエスタ（hiniesta）ともいいます。オランダではエニスタと呼んでいます」

モラエスは竹村に英語で説明してから、およねにはポルトガルの花だと言った。故郷の花がそれに近い呼称で日本語になって咲いていることが嬉しかった。おそらくポルトガル人かオランダ人が日本にこの花の種を持ちこみ、エニシダという日本語が生まれたのだろう。（346-7）

上の引用9では、モラエスとおよねとの間で、「黄色い花」にまつわるポルトガルと日本との結びつきを話題としているが、ここでは、車夫の「ごめんなして」という阿波弁が興味深い。この小説全体で、見落としがあるかもしれないが、阿波弁が出てくるのは恐らくここだけと思われる。小説は、現実の世界により近いもの、近似の世界を描こうとするが、私たちの日常にも存在する方言というものを小説の中でいかに使うかということが大きな問題としてある。およねやコハル、さらに徳島の他の人たちは当時もちろん阿波弁を使っていたであろうが、それを小説に取り込むかどうかは、大変難しい問題であろう。ポルトガル語や英語など、どんな言語にも方言というものがあるが、例えばその方言を日本語翻訳でどの地方のあるいはどの社会階層の方言を使うかとなると大変悩ましい問題となる。横着な翻訳者は、方言が出てきたらとにかく東北弁にする人がいるが、どの方言を使うかで作品の雰囲気が全く違ってくる。出身の研究者が翻訳で山口弁を使ったりしている例もあり、翻訳者の出身地や社会階層で翻訳の文体が異なってくるということがある。翻訳ではそういうことが起こるが、小説でももちろん同様に、方言によって大きく雰囲気が変わってくる。方言の美しさという点、藤本義一（1933-2012）という小説家は、大阪弁を使って小説を書いているが、大阪弁がこんなにきれいな言葉だったのかと驚くほどにとっても美しく柔らかいものである。

3. 藤原正彦の文章

後半部は「祖国愛」から最後の「森羅万象」までが、藤原正彦の文章ということになるが、全体的な印象としては、父親の新田次郎を意識されてか、自然描写も負けず劣らずふんだんに込められている。だが面白いのは、それ以上に数字に関わる文章、描写が多くなっていることである。ま

た、人物描写についても、前半部と比べて、モラエスという人物が、能弁で饒舌、そして数字に強いという風に、だいぶ変わってきている。おヨネやコハル、その他の人たちが友人たちも、書き手の藤原正彦の人柄が文章ににじみ出ており、その点では前半部と比べて生き生きとした感じになっている。『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924)などで知られる E. M. フォースター (Edward Morgan Forster, 1879–1970) という小説家は、『小説の諸相』(*Aspects of the Novel*, 1927) という小説論の中で「フラット・キャラクター」(flat character) と「ラウンド・キャラクター」(round character) という言葉を使い、人物造形について述べている。それぞれ、「平板で成長や変化をしない人物」と、「丸みを帯びて、成長したりいろいろ変化をする人物」ということであるが、それに照らし合わせてこの小説に描かれている人物たちを眺めてみると、新田次郎の前半部ではどちらかというと平板なモラエスや他の人物たちが、藤原正彦の後半部に至るとすっかり変わって丸みを帯び生き生きとした人物たちに変化しているのである。

引用 10

「早速ですが、新しい住所の番地は、富田浦町西富田一五四三です。ここにかいておきましたからどうぞ」

そう言うのと鉛筆で住所の書かれた便箋をモラエスに差し出した。ていねいにカタカナのルビがふってあった。受け取ったモラエスは、それに目を通すや大声を上げた。

「おお、これはすごい。一五四三年、ポルトガル人、種子島へ鉄砲、持って来ました。日本に、初めての西洋人、初めての鉄砲。一五四三、日本とポルトガルをつなぐ数字です。奇跡です」

興奮して真赤になったモラエスを見てうれしくなったユキが、

「まあ、そんなに歴史的な数字だったんですね。知りませんでした」

と相好を崩した。

「奇跡です、不思議です。およねさんの魂、きっと、この家に導いてくれました」

モラエスが感に堪えぬかのように言った。(580)

上の引用 10 は、前述したように数字に関わる場面であるが、モラエスが住むことになる長屋の住所の番地が一五四三ということで、その縁というものをモラエスが興奮した様子でユキに話している。この番地が事実かどうかについてはむしろ懐疑的であるけれども、評伝「小説」として許容されるものであると同時に、興味深いのは、この場面がちょうど小川洋子 (1962–) という小説家の『博士の愛した数式』(2004) の場面を連想させる点である。記憶障害で記憶が 80 分しか持たない数学者の博士と、その家にやってきた家政婦とのやり取りの場面や数字にまつわるやり取りの場面を思い出させるのである。『博士の愛した数式』は、小川洋子が藤原正彦に数学について取材しているという、藤原正彦にとっては非常に関係の深い作品であり、それを考えるととても面白いものであり、小説の技法としてもインターテキストもしくはモンタージュ、パステーションの技法に

近いものともいえる。

引用 11

およねをいたわるようにゆっくり歩いたから、生田川の川べりに出るまでに半時間もかかった。
「ほら、咲いていますよ。川に沿って。うれしいわ。五分咲きくらいかしら」
「五分咲き、意味わかりません」
「満開を十として、花びらの開き具合を表したものです。一分咲きとか二分咲きといったら蕾がふくらんだ程度、八分咲きといったらほとんど満開、五分咲き」
「といったら満開の半分」
二人は声を立てて笑った。(440)

引用 12

「この角から潮音寺までは三分ほど、新しい家は逆方向にその倍くらいです」
とユキが言った。モラエスがすぐに、
「家からおよねさんの墓まで、九分位です」
と言うとユキが、
「モラエスさん、算術が得意なんですね。わたしも尋常の頃は算術が好きでした。よねは好きでなかったのですが」
と口元を少し崩して言った。モラエスは、
「知っています、知っています」
と言い微笑した。(582-3)

引用 13

「およねさんに何度も教わって何度も忘れたけれど、最近やっと言えるようになった。ハギ、キキョウ、クズ、フジバカマ、オミナエシ、オバナ、ナデシコ、秋の七草、と日本では和歌にして覚える」
「随分、日本人は記憶がいいんですね、私には無理だ」
「日本人には和歌のリズム、五,七,五,七,七が身体にしみ込んでいるから、簡単に覚えられる。日本人なら皆、同じ抑揚で秋の七草を言えるよ。実はね、ペドロ、春の七草もあるんだ。それにしても、国民がみな春や秋の七草を和歌で覚えている、というのは何とも素晴らしいことじゃないか。日本人は季節に生きている。衣食住すべてにわたってだ。食べ物だってどの季節にも旬のものがあって、日本中がそれを賞味する。日本人はこのように季節の変化や自然の変化を愛でる天才なのさ。それを通して独特の鋭い美感を養い、もののあわれなどの情緒を磨いてきた。こういった情緒は日本の文学や芸術の源泉ともいえるものなんだ」(500-1)

引用 11, 引用 12 など、おヨネとの会話で、数字に関わるものであるし、算術が得意なモラエスという人物造形となっており、面白い場面だといえる。

引用 13 は、モラエスの友人ペドロとの会話であるが、和歌のリズム、五, 七, 五, 七, 七と、日本人の季節感や自然と日本人を説いた部分であるが、モラエス自身が日本の和歌や俳句を紹介していることに重ねて、エッセイストとしての藤原正彦の姿が現れているといってもよいだろう。

引用 14

「悲しい話。でも、およねさんの歌、敦盛さん、慰められる」

モラエスはおよねを軽く抱き寄せると、およねの手を取って浜辺へ出た。遠浅の海を眺められる小高い所にモラエスがハンカチを広げて言った。

「およねさん、坐りましょ」

二人は松原を背に砂の上に並んで腰を下ろした。およねはまぶしように目を細めると日傘を広げた。

「およねさんと私、海辺で育ちました。二人は海が、好きです」

「徳島市もリスボンも海に面している。二人とも同じでうれしいわ」

「それに、私、海軍にいた、海、大好き」

「でもモラエスさん、散歩はいつも山へいらっしゃるから、本当は山が好きなのかなと思っていましたのよ」

「山と海、両方、好き」

「あら、欲張り」

「はい。私、欲張り。だから美しいおよねさん、独り占め」

「まあ」

人のいない浜辺に二人の笑い声が響いた。(539)

上の引用 14 は、神戸で敦盛塚を訪れたモラエスとおヨネの会話として創作されているが、その艶めかしさといい、仲睦まじい様子など、小説家としての藤原正彦の想像の世界そのままになっている。こんな場面などは実証のしようもないが、小説というものは、小説家、つまりは書き手がそれこそ想像の翼を自由に広げて好きなように描けるので、こういう場面を描くのは楽しい作業にちがいないし、モラエスという実在の人物を描いた評伝小説としてのこの『孤愁 〈サウダーデ〉』に厳密な事実検証を求めるべきでもあるまい。

4. 新たな可能性－父と子の関係

小説『孤愁 〈サウダーデ〉』という小説は親子 2 代にわたる小説ということであるが、小説執筆に際しての実地調査や史実の検証を踏まえての小説であると同時に、評伝小説であるがゆえにモラ

エス像というものが新たに創りだされる可能性はある。その可能性のひとつとして、モラエスとマカオに残してきたふたりの息子ジョアンとジョゼとの関係に着目してよいだろう。だが、その父と子の関係には、父新田次郎とその息子藤原正彦の関係、絆というものが重ねられていて、父と子の対話が込められており大変興味深い。

引用 15

「ところで、学校ではどんな科目が好きなんだい」

モラエスはやさしい微笑を向けながら尋ねた。

「数学です」

「ほう、数学か。別れていても変なところが似るものだ。君のお父さんも、小学校から海軍兵学校まで、いつも数学が一番好きだったんだよ」

モラエスの顔が明るく輝いた。ジョアンに自分の血が流れていることを感じるうれしかったのである。

「でもジョゼは数学が嫌いです」

ジョアンはそう言うとニコツとした。背はモラエスの肩までであるが、えくぼの浮かぶ笑顔はまだ子どもだ。

「ハハハ、お母さんに似たのかな。ところでジョアン、将来、何になりたいんだね」

「数学者です」

「ほう、面白い。それでまたどうして数学者に」

「数学が地球上の何より一番美しいと思うからです。そのうえ、苦労して問題が解けた時の喜びも格別です」(515)

引用 16

雄滝までは坂道が一層険しくなる。先頭を歩くモラエスが、六尺（一八一センチ）もある長身なのに、たった二十センチほどの短い歩幅でゆっくり歩くのを見て、コートが言った。

「山に慣れた人の歩き方ですね。子供の頃、ポルトガルのゲアルダで育った父とマカオの丘を登りながら、『山を登る時は小さな歩幅でゆっくり休まずに歩くものだよ』とよく言われました」

「お父さんはエストレラ山脈の麓で育ったんだね」

「私は残念ながら父の故郷へまだ行ったことがありません」

コートは亡父を懐かしむように言った。

「私は何度か訪れたけど、青い空を背景に灌木で覆われた山々が連なる美しい所だ。麓には松や栗の木が多くてね。懐かしいなあ。あの辺りでは豚の丸焼きが郷土料理として有名だけど、僕は何と言っても羊乳から作ったエストレラ・チーズだ。甘いポルト酒とはよく合い、何とも言えない美味しさだ。ああ、本当に懐かしい。あの白い半生チーズはもう二十年も味わっていない」(432-3)

引用 15 にあるように、ジョアンとの会話で、ジョアンが自分は数学が好きだと答え、将来は数学者になりたいという夢とその理由をモラエスに向かって語らせているが、それはまさに新田次郎と数学者となった息子藤原正彦との対話であると言ってよいだろう。引用 16 の場面は、親友コートがモラエスの山道を登る歩き方を見て、亡き父親を懐かしんで述べている場面であるが、山に登っていた新田次郎と藤原正彦の親子の絆というものがうまく、さり気なく込められている。

5. 小説『孤愁』とモラエス

小説『孤愁〈サウダーデ〉』という作品は、実在のモラエスや彼に関わる人たちを描いている面白い評伝小説作品であるが、これまでの佃実夫（1925–1979）の小説や、モラエスの作品を日本語に翻訳した花野富蔵（1900–1979）、さらには岡村多希子（1939–）の評伝に負いながらも、新たなモラエス像が生まれている。特に、父新田次郎と藤原正彦の父子の対話がモラエスとジョアンの対話に重ねられており、その部分はモラエスの父親としてのふたりの息子への思いに対する新たな解釈と考えてよからう。

小説前半部には気象学者新田次郎、後半部には数学者藤原正彦という書き手が、その小説を支える「声」を文章に巧みに織り込んでおり、大変興味深い作品に仕上がっている。今、モラエスという人、ひとりのポルトガル人のおかげで、ポルトガルと日本と徳島との深い絆が生まれ、それを保ち続けている。モラエスについての資料がごとごとく空襲で失われてしまったことは遺憾極まりないが、僅かな資料によっても私たちは様々に楽しむことができている。

「モラエス文学」という場合、考えてみれば、「モラエスが書いた文学」と、「モラエスを書いた文学」というものがある、二重に楽しめるようになっている。モラエスの実像を見極め探りつつ、今後も検証を続けなければならないが、新たなモラエス像のヒントがこの小説『孤愁〈サウダーデ〉』によって示されていることは大きな方向性を示唆していると考えられるのである。

参考文献

- Wenceslau de Moraes (1916), *O “Bon-odori” em Tokushima (Caderno de Impressões Íntimas)* (PORTO : LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ)
- ヴェンセスラウ・デ・モラエス著、岡村多希子訳（2010）『徳島の盆踊り』（徳島：徳島県立文学書道館、ここのは文庫）
- （2014）『日本精神』（徳島：徳島日本ポルトガル協会）
- 岡村多希子（2000）『モラエスの旅ーポルトガル文人外交官の生涯』（東京：彩流社）
- （1994）『モラエスの絵葉書書簡』（東京：彩流社）
- 佃実夫（1966）『わがモラエス伝』（東京：河出書房新社）
- 徳島県立図書館（1995）『モラエス案内（増補再販）』（徳島：徳島県立図書館）
- 新田次郎、藤原正彦（2012）『孤愁〈サウダーデ〉』（東京：文藝春秋）

花野富蔵（1969）『定本モラエス全集』（東京：集英社）

※本稿は、平成 27（2015）年 11 月 21 日に、徳島県立文学書道館において徳島ペンクラブ主催、モラエス賞実行委員会共催として開かれた、第 17 回徳島県民文化祭分野別フェスティバル「モラエス文学の魅力」で講演した「モラエスと『小説孤愁』～文章から浮かび上がる人物たち～」を基に、修正を施し稿に起こしたものである。

注：

- 1 『モラエス案内（増補再版）』（徳島：徳島県立図書館，平成 7 年），pp. 138-9.
- 2 以下，引用はすべて『孤愁〈サウダーデ〉』（東京：文藝春秋，2012 年）に依り，頁は括弧書きで示す。
- 3 例えば『日本精神』（岡村多希子訳，徳島：徳島日本ポルトガル協会）の第 1 章「最初の考え」，p. 22.

Abstract

This essay is based on my public lecture delivered at Tokushima Kenritsu Bungakushodokan on 21, November, 2015. Wenceslau de Moraes (1854-1928), a Portuguese, lived for sixteen years and died in Tokushima. His *O “Bon-odori” em Tokushima* well depicts Tokushima and its common people 100 years ago through his loving eyes. In 2012 a novel named *Koshu-Saudade* was written and published by Masahiko Fujiwara, a mathematician and essayist, taking over his father's work Jiro Nitta, a meteorologist and novelist, who died before finishing the novel. It is a rare case in the point that father and his son wrote and finished the novel. There are some unique features in this novel as it is written by them two. Also this fiction based on biographical evidences seems to open a new aspect of Moraes in terms of the relationship between father and son.